

新しい詩の声 2023
(第7回)・作品

〔最優秀賞〕

加澄 ひろし

兆し

日が昇り、風は温み、凍えた指が弛緩する
声もなく梢が震え、芽吹きが息を吐く
干乾びた、褐色の殻を、柔らかな鼓動の兆しが
ひき裂いて、沈黙の呪縛を解き放とうと
うごめき、密かな企てに疼いている

朝もやが、遠い山並みを包んでいる
川面を、雪解けのしぶきが駆けおりてくる
河口から、真潮の匂いが満ちてきた
冬鳥は、すでに旅立ちを終えて
冷たい大地は、脈の火照りを抱えている
萌芽を待つ幼な子が、産毛に汗を滾らせる
ためらいなく、剥き出しの素顔を晒すだろう

日の出は、日暮れを指さす入り口だ
怯えの覗くつぶらな瞳は、眩しさに、戸惑い
いつも知れぬ滅びを、東の間、予感する

蔓延る草も、根を張る樹々も
地を這う虫も、空を舞う鳥たちも
限られた刻限を、限られた居場所
与えられた自由に、逃れようもなく弄ばれる
草も樹も、生え出た土にしがみつ
花をめぐる蝶も蜂も、海を行き交う渡り鳥も
翅と翼を、風の流れにまかせただけ

陽は熱く、大地は温もりに沸くだろう
吹く風は、甘美な調べを歌うだろう
天地に轟く雷の声
通り雨の土気の匂い
虹の弧が、明々と浮かんでいる
手応えなく、透きとおったむこう側で
得体の知れない胸騒ぎが、口を閉じたまま
押し寄せる熱狂を前触れしている

〔優秀賞〕

石田 諒

冬への標べ

浅間山が三度 雪をかぶれば
いよいよ里も白く染まる

信州佐久に伝わる標べは

この地の 季節のあいさつ代わり
水も大地もなにもかもが凍てつく
長い長い厳冬を目の前に
寒冷と戦う鋭気を養いながらも
皆々どこか 楽しげである

初霜の朝を予期し
作物を守り抜く農家たち
夕には温泉の湯に浸かり
仲間と行き合い 声を交わす

やや乱暴にも響く彼らの言葉尻は

この地で生き抜いてきた者どもの誇り

訪れた寒さの底で息を吸い込めば

おのれの肺の在処をまざまざと感じる

氷点下の冷え込みを「凍みる」と名づけ

厳しき自然に寄り添ってきた先人ら

衣食住のいたるところ

備えられた生活の智慧はいま

我々に受け継がれているだろうか

おしなべて活動のとまる里山の冬季

たとえ どんなに縮こまるような

極低温の空気に包まれていても

それらはいずれ必ずや ゆるむのだ

標べをなぞって振り返り

人々はまた 内省の時を過ごしていく

〔優秀賞〕

吉岡 幸一

空は満ちているから

透明な硝子の花瓶に花は生けられていない
わずかに開けられた窓からは風が忍び込み
幾何学模様のレースのカーテンを揺らして遊ぶ
窓辺に置かれた硝子の花瓶に注ぐ午後の光は
七色の影を映しながら私の頬を照らしている

硝子の花瓶が空ならば庭で摘んだ花を生けようか
まっ赤な花を咲かせた椿を一輪飾ろうか
水すら注がれていない空の花瓶を眺めていると
なにか大切な事に気づいていないように思え
空は空ではないと花瓶の囁く声が聞こえてくる

空が満ちている 空が詰まっている
空は空ではないと知ったとき私の空虚さに
眩しい光が差しして七色の影を見えない場所に運ぶ

もうこれ以上にも足す必要はない

硝子の花瓶だけで充足していると風が笑う

ひどく遠い場所から群れる鳥のさえずりが響き
数匹の蟻がカーテンにしがみついて上つていく
空の花瓶に水を注いだのは迷いからだろうか
透き通った花瓶に椿の花を生けたのは何故だろう
赤い花の色をつけられた硝子の花瓶は影も赤い

満ちていた空が失われて花瓶は花瓶になる
七色の影が消えて影は色のない影になり光を遮る
椿の花が落ちて花瓶の前に転がり止まり影を生む
私は硝子の花瓶に入った己を想像して震える
満ちた空を汚したことに後悔しそうになる

硝子の花瓶を空に戻そうと手を伸ばすと
花のない椿の葉や枝が光を受けて輝いている
ふと 私は空ではない花瓶にほほ笑んで
ふと これも満ちていると思ひ 知る

受賞のことば・受賞者略歴

●最優秀賞

加澄ひろしかすみ

〈受賞の言葉〉

この度は、私の作品を評価していただき、ありがとうございます。大変光栄に思います。

都市で生活していると、人は、自分が自然の一部であり、人の暮らしもまた、自然の支配の下にあるということをお忘れてしまいがちです。私は「人は自然とともにある」という意識の下に詩を書いていきます。あらゆる生命は、生まれた時代に生きることでできません。いずれの土地に暮らしたとしても、広い大地のわずかな一画を、逃れて生きることはできません。与えられた毎日を、喜びと悲しみを繰り返しながら、必ず迎える命尽きるその日まで、一人ひとり、その境遇のもとで、精一杯生き抜くよりありません。

今日の世界は、数々の災禍と惨禍に見舞われ、

これまで以上に、先の見えない時代に突き進んでいるように感じられます。この詩は、春を迎えた季節の移ろいが、「どの国のどの人にとっても、明日への希望の兆しでありますように」と願う気持ちで書きました。

詩に込めた想いが、少しでも、お読みいただいた方の心に届けば幸いです。

〈略歴〉

東京都出身、宮崎県在住

慶應義塾大学経済学部卒業

民間企業を退職後、生まれ育った東京を離れ、宮崎に移り住みました。

第37回国民文化祭「美ら島おきなわ文化祭2021 詩（ことば）の祭典」入賞

●優秀賞

石田 諒いしだ りょう

〈受賞の言葉〉

このたびは優秀賞に選出いただき、ありがとうございます。受賞の連絡を受けたのは、地区の不

動尊の春季例大祭を終えて帰宅した直後でした。春とともに訪れた、高鳴る知らせでした。

生まれ育った東京を離れ、長野県佐久市に移り住んだのはもう七年も前のこと。都会での経験しかなかった私にとって、時の勢いで始めた中山間地での生活は戸惑いの連続でした。

見える景色は山々と田畑、農が近い日々の暮らし、庭先を歩き回る里山の獣たち。標高の高い佐久エリアは一年の半分、十一月頭から四月末まで寒く、冬の底では最低気温がマイナス十度を下回ります。最高気温がゼロ度以下という日もめずらしくありません。冬季は冷蔵庫のなかのほうがいいのに暖かいくらいなのです。

今回の詩は、佐久地域に伝わる季節文化をモチーフとした一篇です。古くからの言い伝えには、ある種のファンタジーを感じさせながらも、妙な説得力があるものです。実際に見聞きした体験が書かせてくれた作品とも言えるでしょう。

詩を書き初めてから約20年、今回の受賞は、私にとって重要な萌芽のひとつとなりました。佐久

地域のみなさまとも喜びを共有しながら、今後も詩作を続けたいと思います。

〈略歴〉

一九八六年、東京都生まれ。法政大学文学部日本文学科卒業。映像／写真作家、詩人。佐久詩話の会代表、長野県詩人協会所属。高校時代より詩作を始める。現在、第一詩集の出版に向けて編纂作業中。

●優秀賞

よしおかこういち
吉岡幸一

〈受賞の言葉〉

詩を書くことが非日常的なことから日常的なことになって数年が過ぎました。

十代の頃から詩を書きはじめました。思い出としては書き、数年まったく書きもしない時期が続き、また思い出しては書き、また止め、また書き、というようなことを繰り返してきました。

それがこの数年は書かない日はあっても書かない週はないくらいに、詩を書く生活が当たり前の

ようになっていきます。

大袈裟に言えば、書くということが生きるということに結びついてきたのだと思っています。

おそらくは、再び書かない時期が始まることはないような気がしています。それほどまでに、いまの私にとって詩は欠かせないものになっているのです。

このたびは素晴らしい賞に選出していただき誠にありがとうございます。詩を書くことも喜びですが、読まれることも喜びです。この受賞を契機としていつそう詩作に励んでいこうと思います。

〈略歴〉

山口県生れ。福岡市在住。明治学院大学法学部卒業。会社経営（十四年）の傍ら執筆を行う。

・第五十五回詩人会議新人賞・第六回永瀬清子現代詩賞・第三回岡本彌田詩賞・第九回郡上市宗祇常緑賞、等

作品公募の概要

星善博

日本詩人クラブでは、日本全国の幅広い方々と作品公募をおして連携し、詩文化の普及と発展に寄与したいと考え、新しい詩人の発掘を目的に2017年から「新しい詩の声」の公募を始めました。今回で7回目となります。作品募集は日本詩人クラブの会員ではない方を対象としています（会友の方は応募可能です）。

応募作品の中から、最優秀賞1篇と優秀賞を2ないし3篇選び、賞状・賞金を授与するとともに、日本詩人クラブのホームページに、公募状況と受賞作品、選考経緯、授賞式の模様などを、また、機関誌「詩界通信」にも選考経緯、授賞式の様子などを掲載します。

第7回「新しい詩の声」には、北海道から沖縄まで幅広い地域から140名の応募がありました。年齢層も大変幅広く、最年少は8歳、最高齢は91歳の方でした。

今後、受賞者以外の応募受付者全員に、選考委員5名が手分けし、作品についてのコメントを書いてお送りする予定です。ぜひコメントをご覧いただき、今後の創作活動に活かしていただきたいと思います。

選考経過報告

星 善博

今回の選考委員は、秋元炯、天野英、網谷厚子、高島りみこ、星善博(委員長)の5名(五十音順)が務めました。

まず予備選考では、140名の作品から各委員が4月7日(金)を締切日として、メールにて3ないし4篇を推薦することになりました。その結果、予備選考通過作は次の14篇となりました。

あめ

「笑顔」

石田諒

「冬への標べ」

翁長志保子

「ふれーむん のウシの語り」

加澄ひろし

「兆し」

加藤雄三

「死を泳ぐ」

金城藤子

「人の波」

栗田好子

「異常気象」

小宮正人

「地図に無い道」

みずぬまけいだい

「ひとつの小石」

三ツ谷直子

「雨あがりのコーラス」

未来の味蕾

「日記」

森野とうが

「流れる」

屋敷旺甫

「むかえにくるもの」

吉岡幸一

「空は満ちている」

(敬称略・五十音順)

このうち、重複して推薦があったのは「冬への標べ」(3票)、「ふれーむん のウシの語り」(2票)、「兆し」(2票)、「むかえにくるもの」(2票)の4作品。この結果を参考に、4月23日(日)、日本詩人クラブ事務所にて選考委員会が開かれました。まず初めに、重複して推薦のあった4作品については予備選考の結果を尊重して残した上で、5名の選考委員それぞれがいちばんに推したい作品

を、理由を述べて挙げることにしました。結果は次のとおりです。「冬への標ベ」「ふれーむんのウシの語り」「兆し」「むかえにくるもの」「空は満ちている」の5作品。これを踏まえ、さらに十分議論を尽くした上で、全員一致により、加澄ひろし「兆し」を最優秀賞と決定しました。

次に、最優秀賞を逃した4作品の中から優秀賞を選出することにし、5名の委員がそれぞれ2篇を選び投票することになりました。結果は、石田諒「冬への標ベ」(5票)、吉岡幸一「空は満ちている」(4票)、屋敷旺甫「むかえにくるもの」(1票)。この結果を受け、再度十分に話し合いをした上で、石田諒「冬への標ベ」、吉岡幸一「空は満ちている」の2作品を優秀賞と決定しました。今回、惜しくも受賞に至らなかった屋敷旺甫「むかえにくるもの」をはじめとする各作品も、それぞれに独自の個性が光り、読み応えがありました。まもなく、第8回の応募が始まります。次回も優れた個性ある作品と出合えることを楽しみにしています。

選考委員

秋元炯・天野英・網谷厚子・高島りみこ・星善博

(委員長)